

チェック!

早期発見・早期治療が 牛呼吸器複合病対策のカギ



今回のテーマは
牛の呼吸器病
に絞ります。

日に日に寒くなり冬が近づいています。こういう季節は家畜にとってストレスがかかりやすく、肺炎や下痢等の発生につながる危険があります。肺炎には、伝染力が強く牛群に一気に広がるものや、一見治ったように見えても肺にダメージが残って増体率などに影響を及ぼすものもあります。そこで、今回は牛の肺炎(呼吸器病)とその予防法についてご紹介します。

●牛の呼吸器病の特徴

牛の肺炎は、多くの場合ウイルスや細菌などの病原微生物、ストレス、飼養環境などが関係して発生します。そのため、*牛呼吸器複合病(Bovine Respiratory Disease Complex: BRDC)と呼ばれており、発症には3つのステップがあります。

BRDCの発症ステップ

区分	内容	要因
ステップ1	飼養環境の悪化	ストレスによる免疫力低下
ステップ2	ウイルス等の先行感染	免疫力が低下した牛にウイルス等が感染し、気道の抵抗力が低下 主な病原体: 牛伝染性鼻気管炎ウイルス(IBR)、牛RSウイルス、牛アデノウイルス7型、マイコプラズマなど
ステップ3	常在菌の肺への2次感染	マンヘミアなどの細菌が肺へ感染して肺炎を引き起こし、発熱や鼻水、咳などの症状を示す。ヒストフィラス、マイコプラズマなどの感染による肺炎の慢性化は経済的損失が甚大

BRDCは、育成農場や肥育農場など牛の導入が多い農場のみならず、肉用牛繁殖農場や酪農場でも発生が見られます。感染の拡大が速くて治療が追いつかなかつたり、治療しても死亡したりすることもあり、経済的な損失の大きい疾病です。

●牛の呼吸器病を予防するには

BRDC対策には、以下の3点が挙げられます。

1. 飼養管理面での対策

①日常管理(保温と換気、器材の洗浄消毒、清掃の徹底など)

子牛や病牛にとって寒さはストレスです。すさま風が

直接当たらないようにし、敷料をたっぷり敷いて、必要に応じて保温もしましょう。

牛舎内のほこりやアンモニアガスの濃度が高まると、牛ののどや肺が傷付き、肺炎のきっかけになるため、適度な換気も心がけましょう。

哺乳に使用するバケツや哺乳びんは毎回洗浄消毒して、しっかりと乾燥させましょう。また、糞などで汚れた飼槽や水槽はこまめに掃除し、消毒を心掛けましょう。

②離乳、群編成、ワクチン接種時の注意点

離乳や群編成、ワクチン接種など、子牛にとってストレスとなるような作業が同時期に重ならないように調整します。

③移動後の畜舎・ハッチの洗浄・消毒

牛がアウトした後のハッチや牛房は敷料を全て出して洗浄・消毒することが望ましいです。

2. 適切なワクチンの使用

農場に適したワクチンの使用は、かかりつけの獣医師に相談して決めましょう。接種時期の検討には、移行抗体のなくなる時期や病気に感染する時期を検査することが有用です。

3. 定期的な検査の励行

ワクチンの使用とともに、導入時や移動・群編成時には、予防的に抗生物質やビタミン剤を投与することもあります。

細菌に対しては抗生物質が有効ですが、薬剤が効きにくい細菌もいるため、定期的に検査して自分の農場にいる細菌が耐性菌でないかどうかを確認して、治療薬を選択することが望ましいです。

●最後に

病気の対策の第一歩は早期発見・早期治療です。最低1日2回は健康観察し、調子の悪い牛は早めの隔離と治療を実施します。

ジーンの検査室でも牛の呼吸器病に対する検査を用意しております。ご活用ください。